

奴がいる

高野 桜

目を覚ますと奴がいた。
髪の毛がなく、青白い頬がこけた顔立ち。
顔のサイズに比べて異様なほど大きな黒い目。
その上には眉毛も存在しない。
唇もない一本の線のような口が怪しく歪んだ。

——久々の獲物だ——

俺の脳内に直接響いた。
奴の無機質な声。
奴の細い指が俺の額に触れた。
まるで氷のように冷たい指だ。
その冷たさが全身に広がる。
そして心まで恐怖の氷に閉ざされる。
奴の口が大きく開いた。
死への恐怖が全身に渦巻いた。
いやだ、こんな奴に殺されるなんて。
心の中からこみ上げる感情。
いやだ——やめろ。

「やめろおおお！」

気がつけば俺は奴を突き飛ばし、家の外へと飛び出していた。
夢、夢だ。
夢に違いない。

俺は平野に広がる牧場を眺め、深く息を吸い込んだ。
深呼吸をして、気持ちを落ち着け、何気なく牧場の一角に視線を投げた。
羊にしては細い生き物だった。
そして、二本足で歩いている。

「な!？」

そいつは、一頭の羊に近づくと、大きな口を開き、羊をひとのみした。
日の光をうけ、キラリと黒光りした目が、俺の視線に絡みついた。
夢じゃねえ!
俺は走った。
逃げる、それしか考えていなかった。

「車だ! 遠くへ」

家の横に停めてある車に駆け寄り、キーを探す。
しまった! 鍵は家の中だ!
舌打ちする。
その間にも奴は確実に迫ってきている。

「は、予備！ スペアーキーだ！」

予備のキーを車の下に貼り付けてあった事を思い出した。

「くそ！ どこだ！」

俺は地面に腹ばいになり、右手で車の腹を探った。

不自然な手応えを感じた。

これだ！

角張ったものをひきはがす。

キーはケースに入れられ、マグネットで貼り付けられていた。

間違いない。

「は、はやくしなくては」

震える手で、キーを車に差し込んだ。

かちっという音とともに、車のロックが解除された。

すかさずドアを開き、車内に体を滑り込ませ、ドアを内からロックする。

「あぶなかった」

窓越しに奴を見る。

奴は車に近寄り、運転席側のドアを激しく叩いた。

ざまあみろ——俺は心の中でほくそ笑んだ。

しかし、俺の脳内に再び電気信号が鳴り響いた。

——開けろ。開けて——

心なしか、奴は視線を落とし、悲しげな表情で俺に訴えているように感じた。

なんだか心が締め付けられるようだった。

「わかったよ。俺を食わないならな」

奴の目がとたんに大きく変わり、ゆっくりと数回頷いた。

俺は車のロックを解除して、外にでる。

そのとき、どこからわいてきたのか、数匹の奴らが車の中になだれ込んでいった。

「お、おい……」

訝しげに車内をのぞき込む。

シートはフラットに倒され、三人の奴らがせわしなく動き回っていた。

一人はカセットコンロを用意し、一人は器用にまな板の上で野菜をきり、一人は大きな鍋を用意していた。

てめえら、何の用意してんだよ！？

俺の中の恐怖はいつしか燃え盛る怒りへと変わっていた。

「ざけんな！」

俺は鍋を用意している一匹の頭を平手で叩いた。

奴は鍋の用意に夢中になっていて、俺に気がつかなかったのか、びくんと肩を跳ね上げ、ゆっくりと俺に顔を向けた。

大きな目はまるで豆のように小さく変わり、細い口はまん丸に開かれていた。

鳩が豆鉄砲を食らうとは、このことだろう。

なんちゅう間抜けな面してやがるんだ！？

「これでもくらえ！」

俺は間抜け面の頭を鷲掴みにして、額をふりおろした。

強烈な頭突きが、奴の頭にヒットした瞬間、俺の目の前が闇に包まれた。

「ん？」

気がつくと、いつも見覚えのある天井が目に映った。

半身を起こし、周囲を見渡す。

そこは紛れもなく俺の部屋で、俺はベッドに寝ていたようだ。

「夢か——」

体中が異様にだるかった。

変な夢を見たせいだろう。

そして立ち上がろうとしたとき、額がずきりとうずいた。

「な！？」

額に手を当てた瞬間、俺は絶句した。

大きなタンコブがそこにあったのだ。

「夢……じゃないのか？」

それ以来、奴の姿も、変な夢も見なくなった。

あれは本当に夢だったのか？

今でもそのときの記憶は脳裏にへばりついたまま鮮明に残っている。

本当に不思議な体験だった。